





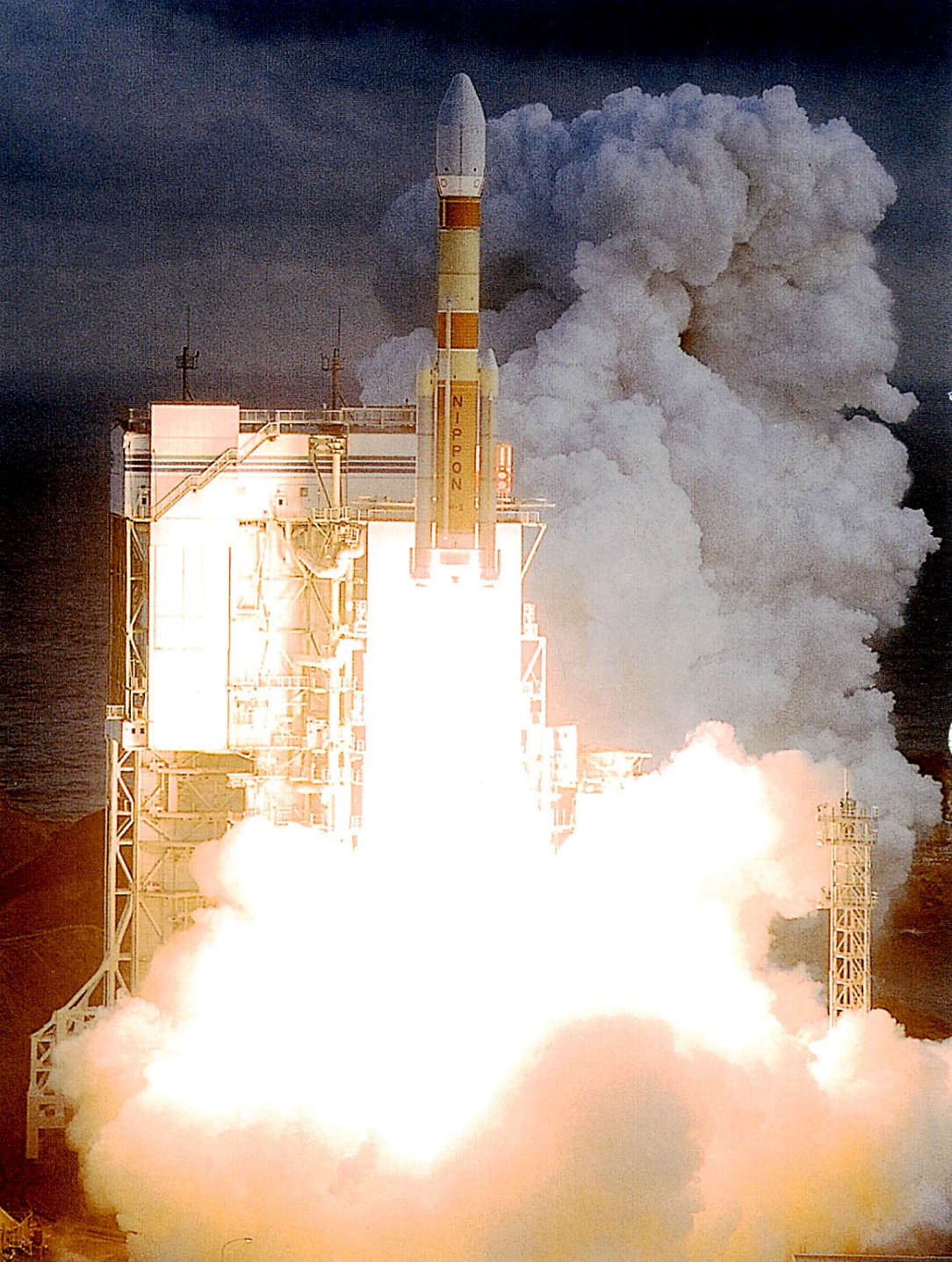
第3章

日本でいちばん宇宙に近い島

種子島

野呂忠秀

(鹿児島大学水産学部海洋資源環境教育センター)



種子島宇宙センターのロケット打ち上げ ©宇宙開発事業団 (NASDA)

「種子島宇宙センター」は、日本宇宙開発事業団（National Space Development Agency of Japan, NASDA）が実用衛星を打上げるために作ったロケット基地である。種子島南端の南種子町に1967年にオープンした総面積860万km²のこの宇宙センターは、フロリダにある米国航空宇宙局NASAの「ケネディ宇宙センター」の日本版。この基地からH-I型とH-II型のロケットによってこれまでに打ち上げられた人工衛星は合計39機であるが、これらは赤道の上空に静止して日本の衛星放送や気象予報を支えてきた。

1950年代の3年間を高校教師としてここ南種子町で過ごした鹿児島大学の佐藤守教授（水産分析化学）は、初めて島に着任した時に乗ったバスの乗客が裸足だったことや、船で6時間もかけて鹿児島市から運んだ電蓄（レコードプレーヤー）が不安定な電圧のため役に立たなかったことを覚えている。

しかし、1989年に就航した高速船「トッピー」は、鹿児島市と種子島の距離をわずか1時間に短縮した。種子島では島の周辺で漁獲されるトビウオのことをトッピーというが、

この高速船はその名に由来する。

日本の南の端にあるここ種子島がロケット基地として選ばれた理由は、人工衛星の静止軌道である赤道に近いことと、建設のために必要な広い国有地が残っていたことであった。現在、日本でもっとも南に位置するのは沖縄県の島々である。しかし、当時まだ米国に占領されていた沖縄にロケット基地を建設することは不可能なことであった。

種子島は農業の島である。今も島の人口の三分の一はサトウキビの栽培に従事しており、南種子町一帯は温暖な気候を利用した早場米や赤米の生産で有名だ。しかし、種子島宇宙センターの建設によって、人口わずか数千人の農業の町、南種子町は、日本の先端技



鹿児島市と種子島西之表市を1時間でつなぐ高速船トッピー ©南海郵船

術を結集した宇宙開発事業を支える町に変身した。現在、種子島宇宙センターで働くNASDAの職員は60人。しかし、ロケットの打上げの前後には、技術者や報道関係者あわせて400人がこの町に押し寄せ、その中には外国からの科学者や技術者もいる。

ロケット射場建設のため周辺の市町村に移住を余儀なくされた住民は、ロケット基地内の作業員としてNASDAに職を得たり、周辺のホテルや民宿で働く。南種子町の麻生孝雄氏夫妻は、4階建てのホテル「サンパール」を経営する。部屋

数30程のこのホテルでは大阪や名古屋から来た単身赴任の技術者が家族的な雰囲気の中でくつろぐ。

種子島宇宙センターに隣接する宇宙科学技術館を訪れる観光客は年間7万人。この島を訪れる観光客のほとんどが必ず訪れる観光スポットである。日本本土とはひと味違うエメラルドグリーンの海と、手入れの行き届いた芝生に囲まれた近代的なロケット基地を背に建てられたこの博物館の中に入ると、種子島が日本で宇宙にいちばん近い場所にあることを実感する。

日本の歴史を 変えた ポルトガルの 火縄銃

明(中国)の交易船が種子島の南端にある門倉岬に漂着したのは1543年。門倉岬に上陸した船員の取調べにあたった当時の村長が、漢文の読み書きに長じていた

ことは、この交易船にとっても、またそれ以後の日本の歴史にとっても幸いなことであった。

中国語と日本語による会話は成り立たない。しかし、中国人と日本人は筆談が可能である。かつてラテン語の読み書きがヨーロッパ知識人の教養であったのと同じく、当時の日本の知識人にとって、漢字で書かれた中国文学を原文で読みこなすことは素養の一つであった。紀元前に中国で生まれた漢字は朝鮮や日本に伝わり、朝鮮語や日本語を記録する文字として使われ続



種子島銃の射撃風景
 (西之表市の鉄砲まつり)
 ©西之表市役所

け今に至っている。英語のアルファベットのような表音文字と異なり、漢字はひとつひとつの文字が意味を持つ表意文字である。現代の日本人にとって、中国語の出版物を中国風に発音することはできないが、簡単な文章ならば少なくとも20～30%程度の内容を理解できる。

この種子島の南端に漂着した交易船が明の船であることは、島の村長と中国人船員が砂浜に杖で書いた漢字の筆談で明らかになった。さらに島人を驚かせたのは、東洋人とは全く違う西洋人の容貌であったが、それにもまして彼らが携えていた細長い筒状の武器であった。それは、雷のような音を発し、瞬時にして数十mも離れた的を破壊するこれまでに見たこともない最新兵器だったからである。

種子島藩の領主、種子島時堯^{ときあき}はこの最新兵器の威力に感じ入り、金2千枚という当時としては破格の値段で2挺の鉄砲を買い求めた。その扱いに習熟した時堯は、この鉄砲の製造を思い立ち、家臣の刀鍛冶、八板金兵衛に鉄砲の製作を、篠川小次郎に火薬の製造を命じた。

種子島では当時既に製鉄や鍛冶が行われていた。島の回りの砂浜は今も黒い模様を呈しているが、これは砂に含まれている砂鉄によるものであり、豊富な木材から作った良質の木炭を燃料として、10世紀頃には既に製鉄が行われていたことが明らかになっている。その後、15世紀には、本土から鉄山師を招いて製鉄業が始り、鉄砲伝来の頃には刀や農機具などが種子島島内ですでに作られていた。

この種子島の製鉄技術と刀鍛冶の技にとって、南蛮渡来の鉄砲の複製を作ることはさほど難しいことではなかった。当時の刀鍛冶には銃身の根元に使うネジを作る技術はなかったが、その作り方も翌年種子島に渡来したポルトガル船の鍛冶職人から習い、種子島藩では1年後には数十挺の鉄砲製造に成功し、薩摩の豪族との戦いに用いて戦果を挙げている。

この種子島産の火縄銃はその名もずばり「種子島」と呼ばれ、鉄砲伝来30年後には、日本の東京都に近い大阪や堺で大量に作られるようになった。やがて、戦国時代の領主たちは、この「種子島」を競って買い求めたのである。

それまで、日本各地の領主たちが勢力を広げるために繰り広げた大小様々の戦いは、刀や弓ややりを武器とし一騎討ちを基本とするものであった。そこに出現したポルト

ガル伝来の最新兵器「種子島」は、この個人戦を集団戦に一変させた。勝利の女神は種子島銃を多く買い揃えた側に微笑んだのである。

最新兵器「種子島」の活躍によって、大名たちの勢力の均衡が大きく変化し、日本が将軍のもとで政治的に統一される時代を迎えるが、この統一に拍車をかけた最新兵器が、京都から千kmも離れた辺境の小さな島から始ったことは歴史の事実として興味ぶかい。

ポルトガルの鉄砲が種子島に上陸したことは、日本に初めてヨーロッパ大陸の文明が伝わったことでもあり、1549年には日本で初めてキリスト教の伝道を行ったイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルもマラッカ、マカオ、種子島を経て日本の薩摩に上陸した。英国ではエリザベス1世の時代を迎え、スペインやポルトガルがマニラやマカオを建設した頃のことであった。

種子バサミ

にしのおもて
西之表市は人口2万人、種子島最大の都市である。この西之表

市の路地にたたずむ牧瀬刃物製作所では、牧瀬義文氏が弟の博文氏とともに昔ながらの方法をかたくなに守りながら種子島特産のハサミや包丁を作り続けている。かれらは種子島に37代続いた刀鍛冶

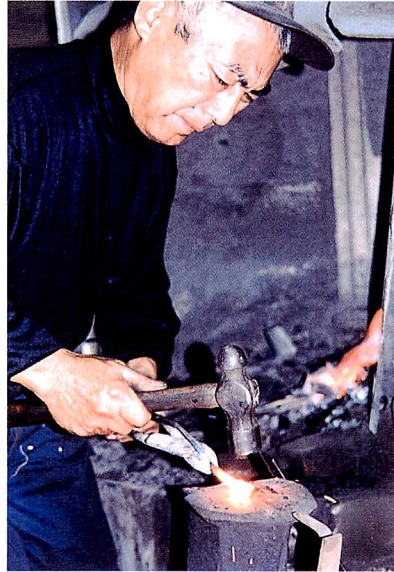
の子孫である。

明治維新後に種子島では種子島銃の製造が禁止されたが、その鉄砲鍛冶がハサミや包丁の製造に転じた。1900年当時、種子島には家内工業的な規模でハサミを作る職人が80人ほどいた。しかし今、種子バサミを作っているのは、牧瀬兄弟の外、わずかに3軒だけとなった。父母から習い覚えた昔ながらの製法を受け継いで、牧瀬刃物製作所では、毎日10丁の種子バサミをすべて手作りで打ち上げる。

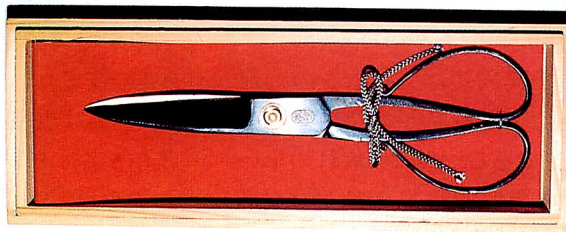
独特なデザインの種子バサミは、漢時代の中国のハサミの様式を伝えるものであり、鉄砲伝来の時に、明の交易船によってもたらされたものとされている。右利き、左利きに関係なく使えることや、使えば使うほどに刃の噛み合わせが良くなることから、その独特な切れ味を求め

た愛好者も多く、種子島を訪れる観光客の伝統工芸品に指定され土産物としても人気がある。

種子島銃と同じように、種子バサミも、かつては島内の鍛冶職人が品質のよい砂鉄を原料として作っ



種子バサミを打つ（牧瀬刃物製作所）
©西之表市役所



種子バサミ
©西之表市役所

たものである。デザインのユニークさと使いやすさから、日常的に重宝がられている種子バサミではあるが、原料として用いられる鋼鉄の品質が近代的なハサミに比べ劣っていることを指摘する刃物業者もいる。

牧瀬氏が種バサミを作るかたわら打ち上げる種子包丁も、この

島の周辺に多いトビウオや魚を料理するのに使い勝手がよいことから、島内では家庭の主婦や漁業者に好んで使われている。彼らが作るプロ仕様の包丁は、一年近く待たないと手に入れることができない注文生産の逸品である。

米国難破船 カシミア号

米国の木造帆船カシミア号(936t)が石油3万樽を満載し神戸に向けてフィラデルフィアを船出したのは1885年(明治18年)4月のことであった。しかし、アフリカ南端の喜望峰を越え、ようやく種子島の南東300kmの沖を航行していた9月11日に大型の台風遭遇したのである。

種子島周辺はフィリピンの近海で発生する台風が北上する際の通り道であるとともに、流れの早い黒潮と複雑な離島の地形とがあいまって、昔から海難事故の多い

ことで船乗りたちに恐れられており、難破船を救助した多くの歴史が島には残っている。

当時の貨物船としては大型のカシミア号ではあったが、台風の威力の前ではすべてのマストを失い、13日の未明にはアレキサンダー・ニコル船長と2名の航海士も波にさらわれ行方不明となった。嵐が去った後のカシミア号は、もはや船体の破損と浸水が著しく、水や食糧も底をつき、航行不能の状況におちいった。

かろうじて船に取り残された12名の乗組員は、救命ボートと急ごしらえの筏でカシミア号を脱出、ボートの7名は現在の西之表市立山に、筏の5名はその北の伊関にそれぞれ漂着し、海岸で働いていた近くの農民や漁民に発見された。

立山と伊関の村人たちは、救助した乗組員達の介護に総出であつたという。この時、立山の小学校教諭は救助した乗組員の中にいた中国人と漢字での筆談に成功、伊関でも小学校の教諭が英語による筆談で、彼らが遭難船の乗組員であることを知った。その後、救助された乗組員たちは船で鹿児島市に渡り、鹿児島県庁のはからいで、神戸と横浜を經由して無事米国に帰国することができた。無事帰国したカシミア号の乗組員の中にはニコル船長の息子も含まれており、その後一世紀を経た1980年に南日本新聞の記者(現社長)、ありそのじゅんや有園純也氏によってその子孫が探し出されている。

天気予報も航海術も未発達で、海賊や住民が難破船を略奪することも多かった当時、この種子島の島民がカシミア号の乗組員に示した善意は、米国のみならず世界の人々に大きな感動を与えた。

この善意をたたえるために、米国政府はカシミア号乗組員の救助にあつた村民に邦貨50円と金メダルを送って感謝の意を示したが、その3年後の明治21年に時のクリブランド米国大統領は、5千米ドル(邦貨6千円、2001年現在の2



カシミア号乗組員の救助に感謝し、米国政府が種子島の村民に贈ったメダル(種子島開発総合資料館収蔵)

©種子島開発総合資料館

億円に相当)を村に贈与した。カシミア号乗組員の救助にあつた2つの地区ではこの贈与金により教育基金を設立し、その利息を永く学校の運営費や奨学金にあてた。西之表市あんじょうの安城小学校と伊関小学校の校庭には、1890年にカシミア号遭難の顛末を述べた紀徳碑が建立され現在に至っているが、特に伊関では今もカシミア号乗組員救助の9月22日には地区をあげての記念祭を行っている。